

理解を提示した話者の「なるほど」

－「なるほど」は本当に新情報を受け入れるのか－

梁 勝奎（名古屋大学大学院生） 嶋原 耕一（東京外国語大学）

1. はじめに

日常会話でよく見られる「なるほど」は、相手の発話から新情報を受け取ったことを示す談話標識である(森山, 2015; 蓮沼, 2018)。しかし、直前の相手のターンに新情報が含まれていない場合にも、それは産出されることがある。その「なるほど」は本当に新情報を受け取っているといえるのだろうか。

本稿では、①話し手が情報を提供し、②受け手がその情報についての自分の理解を提示し、③話し手が何らかの反応をした後の位置で、②の話者が産出する「なるほど」の相互行為的機能について考察する。そのために、その位置で「なるほど」が単独で使われる場合と、「あーなるほど」が使われる場合を比較して分析を行う。

2. 先行研究

会話内で用いられる「なるほど」を分析した先行研究として、森山(2015)や蓮沼(2018)が挙げられる。まず森山(2015)は、「なるほど」「ふうん」「本当?」などを新情報遭遇応答の表現とまとめた上で、「なるほど」を「自分の知識の中で何らかの位置づけができたこと(納得)を表し、「典型的には、理由付けなど一定の論理関係のある位置づけができることを表す」ものとしている(p.68)。「たしかに」と「なるほど」の違いに注目した蓮沼(2018)も、森山(2015)の主張に同意している。蓮沼(2018)はさらに、「なるほど」と「あーなるほど」の違いについて、前者を「論理的に整合性のある情報として、応答者の知識に新情報を導入することを示す」ものとして、後者を「自身の認識との照合を行ったうえで、強化・確認された情報として応答者の知識にそれを位置づける」ものとして、特徴づけている(p.20)。「あー」という感動詞は、「なるほど」と共起することが多いため、「なるほど」の分析には「あー」の有無にも注意を払う必要があるだろう。「あー」の機能については、Endo(2018)が詳しく分析している。

Endo(2018)は情報提供発話を受け入れるとき、発話の冒頭に置かれる談話標識「あ」と「あー」の相互行為的機能に注目した。「あ」と「あー」は、知らない状態から知っている状態への知識状態の変化を表す点は同様であるが、「あー」は提供された情報の一部について事前知識を持っていたことも表しているというのが、Endoの主張である。また、この二つの談話標識と「なるほど」の関係性について、「なるほど」は「あ」より「あー」と一緒に使用される場合が多く、「あーなるほど」を使うことで新情報を受け入れるだけでなく、それ以前に不明確だったものが理解できたことを提示することもできると、論じられた(p.155)。ただ、単独で用いられた「なるほど」との違いは分析されていない。

3. データと方法論

本研究では筆者が独自に撮影した日本語母語話者の会話データと、The talk bank project(MacWhinney & Wagner, 2010)にて配布された電話会話データを用いて、本研究の対象になる「なるほど」のケースを収集した。収集したデータを会話分析(Conversation Analysis)の方法を用いて分析を行う。データの書き起こしはJefferson(2004)に従った。

4. 分析

本章では、話し手が情報を提供し、受け手がその情報についての自分の理解を提示し、話し手が何らかの反応をした後の位置で、「なるほど」が単独で用いられる場合と、「あーなるほど」が用いられる場合を、順に見ていくこととする。

4.1 単独で使われる「なるほど」

断片(1)と(2)は自分が提示した理解に対して確認が与えられた後で、「なるほど」が産出されている。断片の前から6人は、このサークル(ヘルプデスク)をどのような経緯で知ったかについて話していた。

01行目でナミは、タケシからサークルに誘われたのかマリに聞いている。このナミの質問は表面的にはタケシに誘われたことがあるかを聞いているが、前の流れからみると、サークルの存在を初めて知ったきっかけがタケシであるかを聞いていると考えられる。それに対してマリはサークルのイベントに参加できず、その代わりにサークルが活動している場所に行ったらタケシに出会い、誘われたと答える(02, 04, 06行目)。ただし、マリはこの応答はタケシに誘われたことは表明しているが、それがサークルを知ったきっかけだったとは言っていない。ナミもそれに気づき、05行目で「あそっかそっか」と理解したことを表した後、07行目でヘルプデスク(サークル名)について初めて知ったのは「あそこ」ではなかったという理解を提示している。07行目の発話の最後の「て-」と同時に、マリは「て:」と発話を開始し、ナミの発話に続く形で発話を産出している。このようなマリ

の発話はナミの理解が正しいことを表している。そのようにしてマリが確認を与えた後、ナミは12行目で「なるほどね」と発話することでそれを受け入れている。しかし、ナミがマリ

の発話を新情報として受け入れたかについてはもう少し考える必要がある。本研究では、「なるほど」が産出された発話と、その話者の直前の発話に注目したい。07, 10行目では、マリがこのサークルについて知ったのはタケシに誘われる前だとナミが理解していることがわかる。自分の理解を提示することは自分が理解したということを主張する方法の一つである(Sacks, 1992)。そのように提示された理解に対してマリが確認を与えたため、07行から12行目までナミにとっての新情報はないと考えられる。この状況での12行目の「なるほどね:」は、ナミとマリ

断片(1) 【Takeshi-san】

((同じサークルに所属している6人の会話。どのような経緯でサークルについて知ったのかについて話している。01行目の「タケシさん」はサークルの先輩で、07行目の「あそこ」はサークルがよく活動している場所を指す。))

- 01 ナミ : え? タケシさんに誘ってもらってなかったっけ:。
02 マリ : あ私は:;>そう<合同説明会の日になんか予定が入ってて:;,
03 ナミ : あ(.)そう[ゆうことか:
04 マリ : [だからお昼に様子見に行ったらタケシさんがいて
05 ナミ : あそっかそ[っか。
06 マリ : [誘ってもらった()
07 →ナミ : ヘルプデスクを知ったのは:;>じゃあ あそこじゃなく[て-
08 マリ : [て:
09 : もっと[前から
10 →ナミ : [知ってたんだ。
11 マリ : 知ってた°けど°=
12 ⇒ナミ : =なるほどね:

断片(2)も同様の位置で「なるほど」が産出されている。MとFは友人同士であり、断片の直前では、電話会話の録音を研究者から引き受けたMが、所定の時間で電話が自動的に切れることを、Fに説明している。

断片(2) 【Callhome_3007_02:46~03:05】

- 01 F: なんかさみしいじゃん機械に勝手に切られちゃう(と/の)
02 (0. 2)
03 M: う:ん だってよくヤッコやe-あるじゃん(それ)テレ[フォンカード[で。
04 F: [え, [テレフォンカードは
05 : しょうがないじゃん=だってそれはお金が切れちゃうからっ[て
06 M: [ああ
07 : そうかそうか=
08 F: = うんなんか実験のためにさあ:ふ,
09 M: うん[うん
10 F: [せっかく話してるのに中断されてガシャッと切られると悔しくない?なんか.=
11 →M: =m むかつく?
12 F: うんうん

- 13 M: う:::ん.
 14 F: 許せないよ TI. hh [heheheh
 15 ⇒M: なるほどね。
 16 F: hu うん

断片(2)は、自動的に電話を切られることに対する、Fの「さみしいじゃん」という確認求めから始まっている。そして05行目及び08, 10行目の発話は、その確認求めの理由として組み立てられている。10行目の「悔しくない?」は上昇イントネーションで産出されており、Mに同意を求めているように聞こえる。それに対するMはというと、続く11行目で10行目の「悔しい」という表現を「むかつく」に言い換えることで自身がFの発話を理解したことを提示し、それが正しいか確認を求めている。12, 14行目では、Fが確認を付与することでMの理解が正しいことが表明されている。つまり、11行目以降、Mにとっての新情報はないと考えられる。この断片でも単独で「なるほど」を使うことによって二人の理解が合致に至ったことを示しているが、それが新情報を受け入れているとは言いにくいといえる。

断片(1)と(2)の分析から、「なるほど」を単独で使うことが新情報の受け入れ表明をしているわけではなさそうであることが見えてきた。ということは、新情報がある場合に「なるほど」だけを使うと、その直前の発話に新情報として受け入れられる情報がなかったと主張しているように聞こえる可能性がある。このような問題に、受け手はどうのように対処できるだろう。本稿ではその解決策として発話の冒頭に「あー」を置くケースを、次の節で見ていきたい。

4.2 談話標識「あー」と「なるほど」

断片(3)と(4)では、話者が提示した理解が相手に否定され、さらにその否定の理由が語られた後で、「あーなるほど」が産出されている¹。

リナと一緒に遊ぶことになった韓国人が「他の外人」とは違って、日本語の発音がきれいだと説明している(01-10行)。ミレイは11行目で、それがリナが教えている人なのか聞いている。この質問は単にリナが教えている学生なのかを聞いているだけではなく、リナとその韓国人がどう知り合ったかを聞く質問でもある。「教えてる人」と自分の想定を出しているのは01行目から10行目までリナが出した発音の例が教育場面を想起させるからだと考えられる。

この質問に対してリナは、12行目で自分の生徒ではないとまず否定している。それに対してミレイは14行目で「うん」とだけ発することでリナにターンを譲り、話を続けることを促している。続けてリナは自分ではなく、友達が教えている人だと説明することで11行目に対する応答を続けている(15-16行目)。その後、リナの発話は続いているが(16行目)、ミレイは自分の質問に対する応答になりうる部分「他の友達が持っている人たちなんだ」が終わってすぐ「あ::なるほど」と発話し、リナの応答を受け入れている(17行目)。

ここではミレイは「なるほど」だけではなく、知識状態の変化を表す「あ::」を冒頭に付け、「あ::なるほど」でリナの発話を受け取っている。この「あ::」は新情報を受け入れ、自分の知識状態が変化したことを表すと同時に、その新しい情報が完全に想定できなかったことではないことを示す(Endo, 2018)。このように新情報としてリナの応答を受けることは、11行目の自分の想定が間違っていること認めることともいえるだろう。さらにその後「なるほど」と発することで、ミレイはリナと自分の理解の状態が合致したことを表す。ここで「なるほど」だけでリナの発話を受け入れると、二人の理解が合致することを表すことは可

断片(3) [Callhome_1725_06:25~06:48]

(アメリカに住んでいるリナは韓国人のパーティーに誘われて行くことになった。断片の直前からリナはその韓国人について語っている。)

- 01 リナ : もう:hだって[もうさ(.)他の外人とかはみんなね日本語
 02 : シャベるとかよね 結構:発音がくるったりとかするの::
 03 ミレイ : うんうん[うん.
 04 リナ : [なかなかうまく言えなかったり[とか:
 05 ミレイ : [う:ん.
 06 リナ : 雑誌とか新聞とか>読むとき<新聞で:すとか言うのね::
 07 ミレイ : う::[:::ん.
 08 リナ : [だけでも彼は本当にうますぎて::
 09 ミレイ : へえ[え:
 10 リナ : [日本人みたいな hohohohoh
 11 ⇒ミレイ : えそれリナが教えてる人なの?
 12 リナ : . hhh それ私の生徒じゃないのね:?
 13 (0. 2)
 14 ミレイ : うん.
 15 リナ : 私の他の友達:(0. 2)が持つてる人たち
 16 : なんだ[けど [なんカー うん.
 17 ⇒ミレイ : あ : :[なるほど なる-

¹ 断片では Jefferson (2004)にしたがい、「あー」の「ー」部分を「:]」として表記している。

能だが、リナの応答を新情報として扱っているようには聞こえないのではないだろうか。

同じように、提示した理解が否定された後で「あーなるほど」が産出される例を見ていきたい。断片(4)の直前では B により、疫病対策などの技術交流のために行った中国出張について語られていた。

断片(4) [Callhome_1674_00:11:49~12:01]

- 01 B: で:それみてる働いているの見たらね=
02 : =み::んな罫(くわ)一本なんですよ。
03 (0. 3)
04 →A: ° ha:::° 【機械化できる】
05 B: [でよく-
06 (0. 3)
07 B: 機械化:::する(h)必要がないんですよね?
08 (0. 5)
09 A: [° お::°
10 B: [機械化すると人が余っちゃうんですよ。
11 ⇒A: あ:なるほど:ね:じ
12 B: ええ。

この断片では、04 行目の A の発話に注目したい。01-02 行目で B は出張先の中国で見た光景について語っている。B の語りに対して A は、小さい声で「ha:::」と発話することで情報を受け取り、「機械化できる」と発話する。この「機械化できる」という発話は、質問というよりは相手が言わんとしていることを先に出すことで、会話を前に進めている。このようなかたちで相手の発話を前に進めることで、A は自分がそれまでの話をどのように理解したかを提示することもできる。その意味でこの理解提示は、その時点までの語りに関する理解を提示するだけの他の断片とは違って、理解提示を通じて B の語りの流れから予測可能である内容(機械化)を先取りしている。

しかし、その A の理解の提示は 07 行目で B により否定され、さらに 10 行目では機械化する必要がない理由について説明が与えられる。その理由が語られた次の位置で、A は知識状態の変化

を表す「あ:」を冒頭に置き、「なるほど:ね:じ」と発することで B の 07, 10 行目の発話を受け入れ、理解の合致に至ったことを示す(11 行目)。

この「あー」も断片(3)と同様に、自身の提示した理解が否定され、その否定の理由が説明されたことと、関係があるように見える。つまり話者はここで相手の理由説明を、新情報として受け取る必要があり、そのために「あー」を用いたと考えられる。するとやはり、「なるほど」だけでは、直前の情報を新情報として受け入れるという働きは、達成されないと考えられる。

5. おわりに

本稿では、ある語りに対して受け手が理解を提示し、語り手がそれに反応した次の位置に産出される、「なるほど」と「あーなるほど」の相互行為的働きに注目し、分析を行った。4 章の分析のように、理解の提示の後、自分が持っている理解に変化なくお互いの理解が合致に至った場合は単独の「なるほど」を、提示した理解が訂正された場合は「あーなるほど」を産出していることが分かった。

本研究では理解と「なるほど」の関係性について分析するため、「理解提示の後の位置」という位置に限定して分析を行ったが、他の位置でも「なるほど」が同じ相互行為的機能を果たしているかについては慎重に考えるべきである。

もう一つ課題として、本稿では「なるほど」と「あーなるほど」のケースを見てきたが、「あー」の代わりに他の談話標識(へー、はー、ふん、など)が用いられる場合もあった。このような談話標識と一緒に使われた「なるほど」には、「あーなるほど」と同じ機能をしているように見えるものもあれば、そう見えないものもあった。これについても、もう少し分析が必要である。

参考文献

- Endo, T. (2018). The Japanese change-of-state tokens a and aa in responsive units. *Journal of Pragmatics*, 123, 151-166.
- 蓮沼昭子 (2018). 自然談話における副詞の応答用法—「もちろん」「たしかに」「なるほど」を例に— *日本語日本文学*, 28, 1-26.
- Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. *Pragmatics and Beyond New Series*, 125, 13-34.
- MacWhinney, B., & Wagner, J. (2010). Transcribing, searching and data sharing: The CLAN software and the TalkBank data repository. *Gesprachsforschung*, 11, 154-173.
- 森山卓郎 (2015). 感動詞と応答 友定賢治(編) 感動詞の言語学 ひつじ書房 pp.53-81.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on Conversation*, Vol.2, Oxford: Blackwell.